会話文がるとき、やうシインが好きである。

東の江戸

ボロシリのかけら
東京都大地新宿区塔沢

向井豊昭

谷音、はるか真下となり、もう聞こえません。流れのはて、海ちかい村出て、一昼夜過きました。渓流につかった草鞋おもく、すりきれた草鞋のまわりから、針のように藁突き出ています。木綿の着物、あちこち枝て破れ、腕にも顔にもひっかき傷あります。

「江戸、キク、江戸、キク……」と、おれ、唱えながら手足動かしていました。手、枝つかみ、幹抱きます。それから足ひき上げます。江戸とキク、頂きに向かわせる力です。

ルペシペ、ピハイロ、トッタペツ、ナメワッカ。峰々のつらなりの中から、高く高く聳えるポロシリ、親なる地という意味もつポロシリです。人間の土地、見まもっているその山、この世のはて迄みわたせると、アイヌ言いつたえてきました。おれ、江戸眺めて暮したい。天国のキクおいかけます。

おれ、髷ゆってます。おれの名前、イタヤから、高木にかわりました。おれ、もらアイヌ来てない。和人らしく、髷ゆって、キクと会う。

ふかい霧。江戸みえるてしようか。ても、ここ迄きて、ひきかえすこと出来ません。ひきかえすこと、アイヌに戻ることとてます。アイヌ、おそれ、うやまうポロシリ。近つかぬポロシリ。ても、おれ和人。近つきます。

初めて江戸出た日、やつぱりふかい霧でした。昆布ほし、とても出来ません。家の中に寝そべって、おれ、ぼやっとしていま

した。何日も続いた昆布とりの疲れの為てありません。休みの為てした。舟のゆれにあわせ海底探る長い鉤、おれの手にありません。探りとられ、鉤にまきつく昆布の手応え腕になく、海水を流して舟の上にひき上げられる昆布の輝き、おれの目にありません。

木彫りの音しました。父の左手の小刀、飛沫のように動き、盆のおもてに、うろこもようのこまかなつらなり浮き上がってきます。その傍て縫針動かす母の指、波のようてす。

その気になれば、海、何処ても広かるのに、おれ、寝そべっているだけてした。

「えと　ウン　クオマン　ルスイ　ナ」と、おれの口から言葉もれます。江戸にいきたいなあ、という意味のその言葉、おれの口くせ。

呪いのおれの証しの言葉てす。

母の縫針動きとまり、父の小刀動きとまります。小刀の刃、てのひらにあて「ルイケ」と父、小刀左手て突き出しました。

父の右手、よく曲かりません。右足もよく

曲がりません。おまけに右の耳もありません。わかいころ、熊に[illegible]やられたのたといいます。

ルイケ―砥ぎ、という父の命令、おれ追いはらうためです。おもい動きて体おこし、おれ、小刀ひったくりました。裸足の足、むしろ踏み、おれ外に出ます。砥石、川の岸の水汲場においてあるのです。

霧、川口から走ってきます。霧の流れに砥して、おれ走り出しました。霧、草撫て、草、すね撫てます。草のつゆ、すね光らせ、おれ足のうらて大地たしかめ走っていきました。

霧の中からあらわれる木々の幹、おれに馴染みの道しるべです。この道飽きました。おれ江アの道あるきたい。飽きたこの道、弾んて走るおれのならわしおそろしいです。

川のおもてからたち昇ってくる霧といっしょに水すくい、おれ砥石ぬらしました。川の水、アイヌ言葉でトペといいます。トペ、乳という意味。川の水、神からおくられた乳。

親なる地、ポロシリの乳房から流れてくる尊いものです。でも、会所の和人、川の水飲みません。土に穴掘り、水ためています。穴のまわり、板で堅く塞き、穴の上の屋根から下がる釣瓶という物で水くむのです。釣瓶の縄、くるま滑り、櫓のようにきしみます。穴の下の沖走る釣瓶の舟、乳から離れた人の智恵なのでしょうか。

鞘から刃、手あらく抜き、砥石にあてました。黒澄んだ鞘も柄も、若かった父、くるみの木で作ったものです。そこに彫りこまれた渦の形、天地の神たちの姿まねたものといいます。その神、父の命たすけたと、おれ聞きました。父の槍、ねらい外れ、熊の顔かすめたたけたったのです。槍、熊に折られ、熊とぴかかってきました。右の耳、爪で引きさき、その爪で右腕おそい、右のもも口にくわえて、熊、父ふりまわしました。左の手で腰探り、父、小刀ぬきました。それで熊の胸つきさしたのです。

父の大事な小刀、砥石の上すべります。一夏の昆布のとれ高とひきかえに、和人から手にしたものです。縫針、鍋、鉈、米、酒、煙草、木綿……商人の持ちこむ高価な品物そろえること、アイヌ一生はたらいても駄目でしょう。

刃に水かけ、おれ、てのひら当てました。かるくたたき、耳近つけます。虫のように刃響き、刃うたいました。喉ふるわせ、おれ、うたにあわせます。

「えと　ウン　クオマン　ルスイ　ナ」

小刀もち上げ、おれ、刃にみとれました。一筋の銀の糸のように、刃、光あつめています。光の上に、おれ、江戸の錦絵おもいうかべていました。前の年の夏、通辞の弥七、昆布干場で見せてくれたのです。

「江戸インカ」と言って、通辞帳の間から、弥七、うらうちした紙とり出しました。見ろ、という、ほとんど強制の言葉です。インカルヤン　ハニ、御覧なさい、という穏やかな言

い方しらないのでしょうか。

畳んだ紙、砂の上で、弥七ひらきました。おそるおそる首つき出し、おれたち丁丈悲鳴上けて逃け出しました。紙に刷られた江戸の人の賑わい、おれたちにとって物の怪たったのです。生きものの形まねて描くこと、彫ること、神様への思い上かり。生きもの、この世に示すの神様。人それ示すなら、それ悪魔なのです。

「インカ」と弥七、散っていく背中に向かっておもしろそうに叫びました。弥七の言葉、しつこく言えば、インカ、おかしいです。ヤン ハニ、とつけなくていい。インカルと、やわらかに舌まき上け、ほのかな音、つけたさなければなりません。弥七の言葉、かたいのです。

そのかたい言葉、おれたちの逃け足はやめさせます。林の中に散らばり、幹にかくれ、おれたち胸の動き静めました。

目、閉ち、おれ錦絵の色、遮きろうとしま

野花小さい。江戸、大きな花です。

そっと

強きおわんりつ、おれ、陰にあってみました。花のお江戸見ないで、おれの一生おわってしまう。生きていても つまりません。武士のように腹切って、死ねないでしょうか。でも、腹切る理由、おれにありません。おれ、悪いことしていない。死んで お迎ぴするほどの悪いこと、おれしていません。死んで償えるほどの立派な人、おれまいません。殺も殺しまいれぱならぬ。なければならないの、江戸にいるおれの父です。おれの父、武士。昔、此処のお役人。やっていました。おれの母、仲にはかけて夫の前半に、お役人に化されたのです。かたわにならて、夫、狂から帰ってのそのほ。お役人・おれ生まれる前に江戸に戻り、それから三十四年たちます。三十四年、も人、苦しめ、花のお江戸で生きているのです。

した。閉ちた目の裏て、江戸、極彩色に輝きます。市中通る女たちの着物にたくさんの花咲き、花の咲いた反物広ける店もあります。花は野に咲き、山に咲くものてはないのてすか。

おれ、そっと目あけ、林の中みまわしました。花の赤、花の青、花の白、目に飛ぴこみます。~~それらの~~花の下にある食用、薬用の茎や葉、そして根。それらのありか~~を~~示すなにより目印、花てす。花の、食べることも、煎ちることも出来ます。それなのに、おもいかけない美しさて、おれの目に花そよいているのてす……

~~研きおわった小刀、おれ、鞘に戻しました。腰練なわの下にさしてみます。ものたりません。小刀~~ 頭の上の楊の枝はらいました。小刀、枝にくいこみます。頬ふくらませ、小刀、枝から捩きとり、何度も枝に刄いれました。

音たてて枝おちます。片手て立て、葉の繁

る小枝の一つ、小刀で払いました。心地よい音、響かせて、今度一発で小枝おちます。のこった小枝も払いおわると、おれの手の楊の枝、ひとふりの太刀です。小刀、鞘に戻し、その腰に楊の太刀もさしました。

左の手、腰にあて、おれ、悔りの目つくりました。足もと見おろしてみます。足もとの花、ひくいてます。

そんなふうに見おろした武士の姿、錦絵の中にもありました。武士の目の下に花模様の衣物あり、畳にひたいすりつける呉服屋いました。おれの本当の父、武士なのです。狩に出かけた夫の留守に、おれの母、お役人に犯されたのです。かたわになって、夫、狩から帰ったその時。お役人、おれ生まれない前に江戸へ戻り、それから三十四年たつのです。

肩いからせ、おれ、川にそって歩き出しました。おれにそって川流れ、流れの音、おれの足はやめます。海ん毛さん山の下まわると

霧の中から、今所の屋根あらわれました。

柾おさえるたくさんの石、目にのしかかり、抜足の動き鈍くなります。楊の太刀、腰からぬき、おれ、ふり上げました。霧、ゆれます。目の前に立ち上がった人影。

声呑んだ人影に、おれも声呑み向きあいました。つややかな髪のもから、花の香り深てきます。まくり上げた着物のすそに、花の形ありません。でも、腰にまく布、真赤。一気に咲いた花の色です。

細い指で握りしめた籠の中に、つゆにぬれた山菜、山つくっていました。おれも口にする山菜です。親しみ、おれの手からやわらかくさせ、おれの手の楊の太刀落ちました。

通辞の弥七、嫁さんもらったうわさ、おれ聞いていました。嫁でも娘でも、和人の女、おれ初めて見ます。初めて会所に住むのです。

「ミンチ」と、おれ、籠の中、指さし、山菜の名言いました。

「ミンチ」と、嫁さん、おそるおそるおれの言葉まねました。

草の実、赤く見えの上の花

草の実

竹籠

草の実

「ミンチ」と、おれ頷きました。

「ミンチ」と、嫁さんまた言い、ほのかな笑い漂わせました。

嫁さんの唇動き続け、和人の言葉きこえてきます。おれ笑って頷きます。嫁さんの言葉わかりません。でも、花片のような唇、頷かせてしまうのです。

籠の山菜指さし、嫁さんまた唇動かしました。

「ミン」と、おれ、言葉まねました。嫁さん、よこに首ふり、また言います。

「ミン」と、おれ、くりかえしました。首傾け、それから嫁さん頷きました。

「ミン」と、おれ、弾んた声てくりかえします。籠の山菜の葉の筋、くっきりとうき上かってみえました。

「イタク」と、おれ、自分の胸たたいて名前いいました。

「キク」と、嫁さん、自分の胸たたきました。胸のふくらみの間、白い指、弾んています。

眩しくなり、おれの目、瞬きました。

「オントリ　オイテ　トリ　オイテ
サイトリ　サィナ　ミサイナ」
子供たちの歌、はまなすの繁み、ゆらします。
繁みの蔭から首出し、子供のころ、
いつもおれ、歌声覗いていました。
「キゥ　キゥ　キゥ
スンカイナ
ハ　スンカイナ
ハ　キナクス
ハ　ラスソ」
腰屈め、裸足の子供の足、砂の上、こすっていきます。うたいながら先いくの、親鼠。
「スク　スク　スク」と、鳴きながらついていくの、子鼠です。
鼠の前に、罠あります。輪つくった縄の両端に、それ握った二人の子供まちかまえています。まちかまえる一人、餓鬼大将て有名。
罠の先に散らばった白い貝殻の上に、捩き

とったはまなすの実、一つつ乗っていました。親鼠の右手、素早く伸びます。輪潜って御馳走にふれると、そこねらって、縄ひっぱります。音滑らせ、輪縮まります。それより速く、手、罠からぬけています。

鼠のむれから、声上かります。摘んだ御馳走、子鼠の一人にやると、親鼠また身構えます。

「オントリ　オイテ　トリ　オイテ
サイトリ　サイナ　ミサイナ」

団子になった輪、戻して、罠の子供また歌います。鼠のむれ、また動きます。

子供のおれ、体のり出します。繁み、ちいさな音たてます。いっしょにおこった燥き声、またまた御馳走せしめてしまった鼠たちのもめてます。

縄たたきつけ、繁みふりむく餓鬼大将。レタル、こっちへこい、と餓鬼大将、おれのこと呼びます。親鼠やれよ、と言います。

このままなら、貝殻の上の御馳走、みんな

にとられてしまうてしょう。罠もつ餓鬼大将たちの敗けてす。敗けたもの胴上げされ、砂の上におとされてしまうのてす。おれなら罠にひっかかると考えた餓鬼大将の指図に、肌たち、文句いいません。かえって燥きまわっています。おとされるの自分たちてなく、親になるおれなのてす。それわかって、おれきます。おれ、いっしょに遊ぴたいてす。

「レタルレ」

「レタルレ」

はやし声、おれ迎えます。おれの名前、イタク、言葉という意味。言葉、アイヌの力てす。言葉なければ、祈り出来つ、神とのつなかり出来ません。人とのもめ事、解すのも、チャランケという話しあいなのてす。

イタクというおれの名前、呼んてくれるの、父と母たけてす。大人も子供も、おれのこと、レタル、白、と呼ぶのてす。おれの肌、みんなと比べて白い。体の毛うすく、おれ、みんなと違います。おれの言葉、喉のおくにいつ

もつかえ、おれ、イタクてありません。
コキゥ　キゥ　キゥ
スンカイナ
ハ　スンカイナ
ハ　キナクス
ハ　ラスソL
いつもひくく、調子外れなおれの歌です。
腹かかえて、みんなわらいます。おれ、いっしょうけんめい。でも、おれの歌、凧のような弾みありません。

燥き声といっしょに、おれの手首に縄くいこみます。手首の縄といっしょに、おれの体、空に躍ります。砂の上に、おれ、顔からおちます。

ひくくおさえた犬の鳴声、砂の上のおれの耳ふるわせました。
「ウコトL」と、餓鬼大将指さします。磯巾着のように犬の尻穴ふくれて、そこたけ生きものの。もう一匹の犬、鼻ならして近づいていきます。

メノコ・コ〜ン

鼻の下から赤い舌のぴ、ぬれた尻、うまそうになめました。なめた犬の腹の下から、チイエ、力瘤のようです。力あふれ、犬三匹、命綱のように高く鳴き、前足高く上げました。チイエふるわせ、後ろの犬、前の犬にかぶさります。チイエ、すっぽりとメノコ・コルペにはまり、鳴声ひとしきりなりました。レタル、おまえもあやって生まれたんた。和人のチイエにメノコ・コルペ突っつかれ、おまえ、腹の中に入ったんた。おまえの親父、和人たから、おまえの肌、レタルなんた。鬼大将、おれに言いました。違うよ、おれの父ん、アイヌ。熊狩りの名人、おれ、心の中て言葉吃らせました。狩の出来ない体になってしまったの、和人にメノコ・コルペ突っつかせたせいなんた。神の怒りたと、村の人、言ってるの知らないか。

知らないよ、と心て叫ぴ、おれ、走り出しました。目、くらみ、体、空にういてるよう。

相手メノコ・コルペ

あらい息はき、おれ、家の中に飛びこみました。

いろりの前で、いつものように彫りものしている父です。父の敷く犬の毛皮、おれの目、~~[illegible]~~、おれの手、思わつ毛皮つかみました。父の体重せ、毛皮、生きているようにつややか。父とぴったり重なっています。

力入れ、毛皮ひくと、その場に父ひっくりかえりました。いろりの火に、おれ、毛皮たたきつける。灰まい上がり、~~毛皮焼け~~、父と母、咳こみました。

母さんの皮も剥いてやる。燃してやる。と、おれも咳こみながら、父の小刀つかみました。

家のすみっこで膝折り、母ふるえています。足ひらき、小刀つきつけ立っているおれの目のトの母、ちいさい。高ぷったおれの声、屋根つきぬけ、大きな気分です。

不自由な右足ひきつり、父、後ろから、おれの腕おさえようとしました。父の曲がらぬ右手、役にたちません。左手の力、おれの右

腕につたわり、思いかけぬ痛み、骨迄届きました。

おれの左手、父の左手首に走ります。骨の痛みうすれ、おれの力、父にまけません。

のめくるようにいろりに近つき、母、毛皮、薪ではさみとりました。入口の土の上に、薪といっしょに投げ出され、燻っている毛皮、つややかな毛、もうありません。父の狩りにおともした犬たったそうです。熊にやられたときもいっしょたったその犬、遠くはなれてほえたてるばかり。そのために、父、危いめにあってしまったといいます。役にたたなかその犬、父の手であの世に送られたそう。それ、アイヌのならわし。主人から切かた犬、生きること許されないのです。何故、母さんの皮、剥がない。和人とやったんたろう。おれ、生まれてしまったんたろう。剥け。母さんの皮、剥け。と、おれ、父のてのひらに小刀おしつけ叫びました。体ふるわせ、母、泣きます。泣声のあい間

から、母、許えました。母さん、もう良たけ。死んだ心て生きてきたよ。父さん、もう狩出来ない。体、不自由。父さんの手足になること、母さんの傍いたよ。

もういい、と父の怒鳴声しました。イタク、父さんの子供た。父さん、アイヌの名前つけた。言葉ゆたかに育ってもらいたい父さんの願い、おまえの名にこもっている。

宙みつめる父の目に涙ひかり、おれの肩おちます。

……おそるおそる手ふれると、母のメノコ。コルペ、海草のようにぬれていました。五本の指、穴の中に滑りこみ、そのまま肩迄滑っていきます。もう一つの手やると、その手もすっぽりと穴に入りました。思いきって頭つっこむと、おれの体、もう胎の中です。

メノコ・コルペ

胎の中、冬の寒い海の色。体縮め、おれ叫ぼうとしますか、言葉出ません。手足ばたつかせ、おれ、泳こうとします。泳いでそこから逃げ出したい。でも、手足こわばり動きま

せん。おれ沈む。もう駄目。たすかりません

――――

自分のうなり声で、おれ、目、さめました。心臓なっています。両手で胸おさえるおれの耳に、犬のような息つかい聞こえてきました。

足音しのばせ、おれ、犬の音に近つきました。蓮たらしてかこっている父と母の寝床から、犬の息つかいするのです。

蓮のすきまに、おれ、目やりました。

[illegible]側に母寝てます。向こう側に父寝てます。

[illegible]二つかさなって[illegible]います。森[illegible]髪のように[illegible]上の影。母です。[illegible]ように、[illegible]ぱっぱり[illegible]何くように胸そら[illegible]寝てる場所、いつもと同じ。離れた二人、同じ、母の[illegible]。[illegible]。[illegible]ように服ひろげ[illegible]の下の[illegible]。父の[illegible]。[illegible]。[illegible]に[illegible]。自分の服に、自分の手、[illegible]弾け、[illegible]ています。

[illegible]えた手、示しあわせたように激しく動いています。息つかい激しくなり、父の口から母の名もれました。母の口から父の名もれました。

おれの心臓、またなります。自分の寝床にはうように戻り、おれ、頭から、おれの蓮かぶりました。

父の呼ぶ母、いつの母なのですか。母の呼ぶ父、いつの父なのですか。皮になった母なのですか。父なのですか。生きた毛なみ持っていたころの母なのですか。父なのですか。皮のアイヌ、おれ、きらい。戻らぬ毛なみ振りかえるアイヌもきらい。おれ、和人の子でいい。

莚の下のおれの手、ちいさな拳握って目覚めていました。

昆布漁おわった浜の砂に、まあたらしい足跡、賑かです。足跡みんな会所へ続き、柵の外にたくさんのアイヌすわっていました。

門の中の庭の莚に並んですわっているの、役つきのアイヌ。総乙名、脇乙名、乙名、小使、土産取たちです。

土産取あわめ布、お役人への土産、縁側の下に積んであります。昆布、煎海鼠、小刀の鞘、盆、糸巻……細工物の殆と、父の作ったもの。でも、父、外にすわる一人。おれ、も

ちろん、父と同じです。
おれの目、キク、探していました。見えるところにキクいなくて、残念です。見えるのお役人たち。正面の高い部屋から、祇姿で、こちら見下しています。
年の初め、松前藩の支配から、幕府の直割になり、お役人の顔ぶれ、変わっていました。でも、一段ひくい縁側にすわっている通辞の弥七交易とりしきる支配人、庭のアイヌのかたわらの番人たち。顔ぶれ、すこしも変わりません。世の中いつも、高い所で変わるのですか。
三宝の上の文書、おもむろにとり上げ、お役人の一人、重々しい声で読み上げました。
お役人の声、とまります。通辞の弥七、手にした紙に、目、やります。
コタンゴタ　ヘンバテ　コラチ……と、弥七の言葉、いつものようにかたいです。
コシサムイタク　クエランペタクと、不気嫌な父の声、隣でします。おれ、和人の言葉しらないよ、と言っているのです。

お役人、弥七、お役人、弥七と、言葉わたされていきました。父のふるえ、おれの右肩につたわります。母のふるえ、おれの左肩につたわります。草鞋はけと言うからです。番ゆえ、和人言葉つかえと言うからです。

おれ、ふるえました。おれのふるえ、父のふるえと違います。母のふるえと違います。二つのふるえ突きはなし、おれ、立ち上がりました。

「イヤイライケレ」と感謝の言葉、おれの口から飛び出します。

父と母、下からひっぱりました。役つきのアイヌたち、おそろしい顔して振りむきます。お役人、こちら指さし、番人二人はしってきました。おれの腕おさえ、庭につれていくのです。

「ヤヨクチカエワ」と縁側の弥七、地面さして言いました。番人、地面に、おれ押しつけます。感謝の言葉いったおれ、わるかったですか。番人の手、ふりはらい、おれ、胸はっ

てすわりました。

「エパケ ケウェリL」と、弥七、眉根よせて言います。頭高い。そう言われても、おれ困ります。すわれと言ったから、おれ、すわりました。頭、上についています。頭、体より高いのあたりまえです。頭立て、おれ、正面のお役人にらみつけました。

お役人、口、横にひきさき、何か言いました。おれ、弥七の口に、目、やりました。よく見ると、弥七の口も横に裂けて言葉いいます。弥七のアイヌ言葉。かたいわけ、そこにあります。力むの駄目。威張るの駄目。おれ、肩の力ぬき、自分の名前こたえました。

お役人、やっぱり横に口動かし、また何か言いました。その口、疲れます。心疲れ、減ぴます。

おれ、キクの口、思いうかべました。あの口、花片。神の風うけ、すなおにゆれる花片です。おれ、自分の口に、そっと手やりました。おれの口、キクと比べて、とても大きい。

おれも、夜露。散らばし、おれ、見ます。光り、星光り、
おれも流れる星見ます。
なのです。流れる星、かい文字ま
といっしょに、キクの名。口から溢れ、腹の下で、おれの
チイエ、かたくたちあがりました。赤い肉、なみだ ぬれています。またひらき、
手チイエつかみます。砂ふみしめ
「キク、キク、キク」呼び声にあわせるおれの手の動き。
キク、剥かすよう。母も剥かされたのです。江戸の父と、
おれ同じ。うらみごと、書きません。手の中のチイエ
抱きしおれました。殴り倒されたように、おれ、
砂の上に、体、たおします。
星の光り、目に痛く、おれ、目つぶりました。涙、目、
ぬらします。目、こするおれの手、空の
ように遠く感じます。
砂の上、転げまわり、おれ、うめき
ました。汚なすのとげ、おれ、剥し、とげ、かじり、おれ、
うめき、こらえました。こらえた唇ふるえ、笑い、
割ります。おれ、笑い……
大きな鳥、羽ひろげ、星の光、まっ黒です。あれは、おまえ
もっくか行ってしまえ、とおれ叫びました。羽の音響き、
山犬のような嘴、まいおりてきます。たすけてえ、とおれ
のエア、羽音よりも鋭く、鳥、驚いて逃げていきま
した。おれの笑い声、追いかけ、鳥、向き変えおそっ
てきます。たすけてえ、とおれ。鳥逃げ、おれ、また笑い
ます。笑う。叫ぶ。笑う。叫ぶ。もうやめるように、

とても難しいです。

たも、この世の花、いろいろあります。
弥七の声、また聞こえました。その気なら、今、髷ゆわないかと言うのです。
「エクエウオピッテ まけ」と、おれの首、言葉にあわせて大きく頷きました。
おれの後ろで、砂の崩れるようなアイヌたちのため息しました。肩聳やかし、おれ、背中でため息こらえます。
髷ゆうおれのために、莚、用意されました。すわり直したおれの傍に、桶運ばれます。桶の中から湯気たちのぼり、ゆらめいていました。心ゆらめき、おれ、目、つぶります。
あたらしい足音しました。おれの鼻、足音探ります。漂う匂、キクの匂てないてすか。目、あけると、髪ゆいの道具もって、キクの目まんまるとありました。
飾り玉のようにきれいな目の玉です。おれの目の玉ミすりあわせたら、とんな音するてしようか。それ、わるい考え。キク、弥七の妻です。おれ、また目つぶり、おれの目の玉

腕（うで）、おれの家の中、
のとなりに腕くっつき、足のとうんとくっつき、
客があふれていました。お役人から
いただいた酒樽でも、おいわいのごちそう、みんなやってきたのです。
神に捧げる楊の枝、父の指図する母の指、踊っているよう
削り小刀、花めいたん削ります。村の役
削り柳、いろりの縁にさし、火の神への祈りと並び、おれの始めました
「モシルコルフチ。パセカムイ。タパントイナウ
トゥラノアエコオンカミ、タパン
タパンペ、ネノイタク……」
イタクの酒、お捧げしましょと述べる父です。
おれの名。もうイタクでない。言太（こんた）という名、お
役人からいただきました。もう、タパンペ ネノ コタ
おれ、まゆしかめます。
「アエヤイトゥパプ オル アエコプンキネ アイヌ ミトポ
アコル コツンテ エホプケキ ニサスヌ スクプ
キロク クニヒ チエコインカル……」
父の祈り続き、おれのまゆねますますよります。
火の神、小神の中であらため見守っ
ているのだと、感謝する父です。
アイヌの子孫
二つの血ぶつかり合い、混ざります。
おれ、引き裂かれることできないのでしょうか
こめかみ押さえ、おれ、
立ちあがりました。
客の膝の間ぬうようにして、おれ、よろめくよう外へ出ます。
おれ、頭なでてました。アイヌの
髪そりおとし、おれの頭なめらかな和人です。
アイヌの祈り、おれ、もう
「イタク・イタク」
母の呼び声背中でしました。

かくしました。

会所の裏山、木の葉赤く、夕やけの空、赤いです。はきなれぬ草履の鼻緒はさみ、おれの足の指、赤くむけていました。赤い木の葉、鳥のように空飛び、赤い夕やけ、あしたの青空しらせます。おれ、江戸へ飛びたい。江戸へのまち、江戸の空、江戸の父と会いたいです。

~~江戸へ逃げおれの苦しみ、言葉で投げけ、父の前で胸はりたい。足の指の赤い痛み、~~

おれ平気です。

「手習いかしと、会所の門番、おれに言いました。

「はい、お通し下さい」と、おれの返事、和人の[illegible]です。

お役人のお言葉で、おれ、手習い始めました。お師匠さん、弥七です。

馬のいなき、馬屋から聞こえました。おれの心、いなきます。手習い終わると、キク、今日も、おれにお茶、御馳走するでしょ

う。

馬のいななきまた聞こえ、今度おれ、体もいななきました。長屋の外に、キクの姿みえるのです。ものほし竿に縄てぷら下げた大根、キク一人て外していました。

キクの手の縄の大根ゆれています。大根まね、大きく体ゆらしながら、おれ、近つきました。

「芋太、何のまね」

まるい目て、キク言いました。お役人から頂いたおれの名前、すっかり耳なれました。

「わたし大根、大根ゆれてます」

キク、手の大根に目、やり、声たてて笑いました。キクの体ゆれ、大根のゆれ大きくなります。

「おちる、おちる。もってえ」と、力のぬけたキク、おれに助けもとめました。おれ、あわてて手、出します。

長髪ゆって間もなく、おれ、たねまき手伝が。会所の裏の空地耕やし、便所の糞、

大根です。

そこにまくのも手伝いました。

とれもこれも、初めての仕事です。おれの目、輝きました。でも、糞まき、目、濁らせます。

アイヌにとって、糞、魔よけなのです。シホンタク、古糞のかたまりという意味の名前、つける親もいます。魔物から守り、丈夫に育てるための名前です。でも、たねにやる糞、魔物から守るためでない。たねに食べさせるためだと、キク言いました。おそろしいことです。神様の土に糞やり、土、変えてしまう。本当におそろしいことです。おれ、息こらえて糞やりました。和人のおれ、和人のやり方に従わなければなりません……

キクの腕から落ちかかる大根、おれの手にふれました。糞の色、思い出し、おれ、目つぶって抱えました。

キクのわらい声、とまりません。

「はやく、とって下さい」と、うす目あけて、おれ言いました。

「力ぬけてしまった。後は、高太にまかせるよ」とキク言います。キクの言葉、あれ強くします。

「何処へ運びますか」と、おれの目もとに戻りました。

「こっち」と、キク、先に立って導きます。

納屋の戸、あけ、キク、土間に延広けました。抱えた大根そこにおき、おれ、ものほし場に戻りました。大根たくさん、竿にのこっています。

「後はわたしやるから」と、キク言いました。

「まかせて下さい」と、おれ、大根に手、かけます。

「すまないね」と、キク微笑んで、別の大根に手、かけました。

大根運び、おわり、キク、納屋の戸しめました。キク、おれに寄ってきます。キクの手、やわらかに動き、おれの着物の汚れ、はらってくれます。

「手、洗うよ」と、キク言いました。頭にかぶった手拭、キク、とります。髪の匂、うけ

「おまえ、もってるもの、書いてみなし。」弥七、ぶっきらぼうにいった。

自分の手　おれ　目の先　もってきました。おれ、筆しったことです。

「筆ですか」

弥七、首、傾けました。おれ、左の手、目の先に　やりました。

「何ももっていません。」

「よこせ」と、弥七　うつ　にぎりこかせました　おれに手　のべました。おれの左の手、筆にあたります。今の筆、弥七とりました。

「姉と、弥七の字、違います。目の前のもとり上げ、おれ　ました。弥七　はは手で、

おれ、目手で　うけとり　宙にたらしました。

宙にたれた姉の上、弥七の筆にしります。筆にそい、おれの目の玉動きます。

「ふ　る」と、[illegible]。

おれ、弥七の書いたもの、言にしました。おれ　弥七の筆　おれ言、斬るまね

「ふ」と言ったとき、動きません。その下の文字、「て」と[illegible]書いています。右にのせてよい三つ、右のようにおれの心押しつけます。

「耳を貸せ」とよく聞けと弥七、言いました。おれ、目、つぶります。弥七、言葉、おれ、まねました。

「もう一回」と、弥七の言葉つめたいです。

弥七、言葉、おれ、まねました。

三がまね、目、ねます。

弥七の音、きいて、言葉はみ出てしまう。[illegible]森や海から

はみ出た音、おれ、どうしてもあせません。

添

なから、おれ、キクの後ついていきました。
釣瓶の音きこえ、水の音しました。水桶下
けた天秤棒、肩てゆれ、肩て鳴っています。
弾みのついた天秤棒にあわせ、馬屋に向かう
男の足も弾んでいました。
「御苦労さま」とキクの声も弾み、「大根干
せたかあ」と男の声も弾みました。
「江戸にも大根ありますか」
「あるよ」と、キク、釣瓶に手かけ、言いま
した。頭の上の車、踊るようにまわります。

「江戸にも釣瓶ありますか」
「あるよ」と、キク、汲み上げた水、洗桶に
うつし言いました。
「江戸、見たいです」
「見たいねえ」
キク、おれの前に、洗桶おしてよこしまし
た。
「あら」と、キクの手、洗桶から離れます。
井戸かこむ柱の傍に、黄色い花、さいていま
した。

え、ひ、も、せ、す、

おしまいの文字を縮めるようにして、弥七、怪物貧乏おれの手の筆、

ようしました。

きょうしょ、おれの字からへ手習いのもくさつします。

筆おりて、おれ、隣おん婆の足、こっそりもみました。えんかわの板、おれのきにそしみません。おれの体、土とつなかりてきました。

「ア、文の家、芝すぐ下生きた土です。土の汗、土の臭い芝延び」とおし、おれも汗かき、臭いています。

「それを使って、すみをすみに書いてみなし」

なし、墨とりあげ、手習いしたおれの文字おれに示します。

「すみ、ですか」

「とりあえずみを書いてみなし」

「いろ、はに、ほ、へ、と、ち、り、ぬ、るを、わか、よたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす」

「あさきゆめみし、ゑひもせす」

後ろの文字、黄にしました。

「すと、もう一度、いろはにほへとちりぬるを、わかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす」

弥七、怪物、うすいいろ、うなつきます。おれ、すみすりこのおしまこと。すのかたち、ひかりめます。すみの形、ぼひきします。筆とり上げ、筆の先。すっかりにやりました。

怪のさ、おれの心にわかりました。形ります。すみの形のすみ、形ります。心酔わせ、おれの筆、紙の上はしりました。

「いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす」

こえし

こいろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす。

「よしよし」と弥七、ほめ、おれ、この文字、ながめました。おれの目、すみのかたち、形ります。

か考

足のりています。

文字二つ、目の中いっぱい大きいです。

花一本、手で折り、キク、髪にさしました。
「この花、わたしの名前のキクよ。ここにも花。~~ここも~~いい所ね」

こまかな雨、~~うっすらと~~簑ぬらし、肩ゆらせ、おれ、歩いていました。ゆれる簑の肩て小さな滴はね、滴と滴よぴあって、肩流れます。

雨ばかりて、昆布とりの夏、なかなか始まりません。でも、雨、簑たのしませてくれます。

「こんにちわ」と、おれの声、滴のようにはねていました。
「こんにちわ」と、門番の声、雨の向こうの景色のように霞んているの、かわいそうです。
「手習、休みかもしれんな」
霞んた海、ぽんやり眺め、門番いいました。
「きのうやくそくして、きょう、きました」
「内儀さん、熱高くて、寝たっきりと聞いている」と、門番の相変らつの声、少しも心あ

りません。

簑の音たて、おれ、会所の門、潜りました。簑、強くゆれ、ゆれ楽しむゆとり、おれにありません。

「御免下さい。言太てます」

勝手口から、いつものように声かけると、戸、ひらき、弥七の顔つき出ました。

「キクさん病気、本当てすか」

「ああ」と、弥七の言葉すくないてす。

「とこ悪いてすか」

「風邪らしい」

「夏の風邪、なおりにくいてす。わたし、薬草もってきます」

「薬草はのませた」

二人の間に、言葉、途切れました。

「お大事に」と、おれ言葉保しました。その言葉、キクの枕元て言いたいてす。ても、弥七、勝手口に塞かり、動いてくれません。背中まるめ、おれ、向き、変えました。戸のしまる音、おれの後ろて強くしました。

沙寝 戒

籠のおもさ、肩に感じ、おれ、会所の門に近つきました。門番の肩、おれの肩と同じようにおもそうです。門番、何おもいのですか。

「お邪魔しましたし」と、おれ、深くあたま下げ、門、出ました。

熱にうなされたキクの顔、目にうかびます。ぬれた手拭、ひたいにあてる弥七の顔、目にうかび、おれ、目の中で弥七おいはらいました。

キクの枕元にいるの、おれです。手拭、ひたいにあて、おれ、キクのほほに、てのひらやりました。てのひら、油のように粘り、熱くなります。

キクの喉、虫のように動き、キクの胸元に汗ふき出ていました。おれの手、キクのほほ滑り、喉滑り、胸に滑ります。そこから先、目にうかびません。おれの知っている乳房、赤ん坊のときに吸った母の乳房だけです。

キク、目、つぶり、すこしも動きません。おれ、キクの頬たたきました。キクの首、横

にかたむき、そのままやっぱり動きません。キク、死んだのですか。大変です。キク、死んだら、どうしよう！！

おれ、空見上げました。小さな雨の粒、おれの顔にふりかかります。見つめていると、おれ、空に昇っていくみたい。空に昇り、おれ、キクといっしょにくらしたいです。武士の息子。武士、腹切り、命、潔く捨てるのです。

足、つまつき、体、前にのめりました。長雨で山の肌、削られ、足もとに、土、たくさん、崩れ落ちていました。

土の中に、土器のかけら、混ちっています。石の矢尻、混ちっています。散らばっている白い骨、犬の骨のようです。みんな、みんな、捨てられたもの。おれたち、捨てなければならないのです。

たち昇る霧、茶毘の煙のよう。熊笹ゆらす風の音、茶毘の炎の音、おもい出します。

胸おさえ、熊笹の上に、おれ、倒れました。動くもの、霧と熊笹とおれの胸だけ。胸の動きはてのひらあてて、言葉わすれていました。

家出るとき、父も母も、こんなふうにてのひらあてて眠っていました。胸底うてのひらの聞き、何故、目にうかぶのですか。

てのひらのような白い雲、青い空にくっきり見えます。いつの間にか霧消え、風の音しません。聞こえてくるの水の音です。登り続けたおれなのに、水音きこえる、おかしいです。おれ、ポロシリ下って、もとの谷川に戻ってきたのですか。

木洩れ日うけて、おれの体、うろこのよう。おれの肌、川に入ったように冷たいです。霧より冷たい日の光、不思議です。

体おこし、手、上へ伸ばしました。枝つかみます。上、上、上。逃げるように這い上がるおれの耳に、水の音、ますます強く響きます。

目の前から霧消え、見通し、不意に広がり

ました。黒い岩、空の中に高く伸び、白い川、滝のように広がってきます。

光刻む水の流れに、おれ、顔つっこみました。喉から胃袋へ命流れ、おれ、産声のように、流れの中で顔ゆさぶりました。

流れ、目で追い、おれ、ゆっくりと白い川、見上げました。白い川、動きません。夏の日の下で、雪のつらなり、川の形つくっていたのです。おれの足もとの雪わって、流れている水たったのです。

ポロシリ、やはり、人間の場所ありません。頂きから、江戸、きっと見えるでしょう。雪の川に沿いながら、おれ、登り始めました。岩のおもて、おれの足首の高さに松の緑は立っています。ためしにつかみ、ひいてみました。根、つよく、おれの重さこらえます。

目の上、一面、黄色い花、ふき出ています。小指の爪より小さな花弁よせあわせ、菊の形花小さくつくっていました。生きたものみんな、此処も小さいのです。

くるる此処です。
ます。

菊花一本、根もとから折り、おれ、髪にさしました。

ここにも花。ここもいいところ。ねしと、おれ、キつの言葉まねてみました。涙あふれ、おれ、とけていくようです。いらないもの、みんな流れ、おれのまわりの生きものように、おれ、小さく、濃くなっていきます。

這松つかみ、足、ひき上げました。次の這松、おれの上にもうありません。あるもの雲です。絹のように云かり、雲、飛びます。

雲の裾、おれの足の下の這松おおい、斜面すべって流れます。流れのあとの光まぶしく、松の葉、光のようです。

四つん這いのおれ、息、喘かせ、立ち上かりました。おれの爪先から、うねり打って大地落ち、おれの目の前の空の向こうに、うねり打って大地聳えています。山の腹の緑ひきさき、白い雪、真一文字に輝いていました。

目の前の山のうねりの蔭から、もう一つのうねり現われ、その前から、もう一つのうね

り繰えます。目、後ろ、おれのまわり、山ばかりです。

ポロシリの尾根のはて、おれの右、おれの左に岩の拳つくり、岩の腕、岩の肩、おれ、目掛けて、せり上がっています。おれ、岩の首。ここから見すえなければなりません。

息ととのえ、おれ、後ろ向きました。山と山にはさまれて、池のような川、目の下はるかに見えます。川のはての、おれの村、見えません。海、見えません。海の向こうの和人の島、島の真中の江戸、見えません。江戸の大根、江戸の釣瓶、花撫様の女の着物、そして、おれのこと指てた江戸の父、みんな小さくて見えないのです。

体崩れ、おれ、すわりこみました。体ささえる腕に、這松の葉、痛いです。

着物のえりに手、かけ、おれ、胸ひらき、腹出しました。這松の葉、むしり、葉の先、腹にあててみました。左から右へ、腹の上、ひっかいてみます。ひっかきのあと、腹の皮

に赤く残りました。

「ヌカル　ルスイ　キク」

おれの口から、アイヌ言葉もれました。

「キクに会いたい」と、おれ、あわてて和人言葉で言いなおします。和人言葉もれなかったおれ、憎い。おれの中のアイヌ憎い。山と空の景色憎いです。

立ち上がり、腰に差の小刀、ぬきました。和人言葉、頭で組みたて、おれ、ポロシリの神に叫びました。

「見ている、おれ、腹切ってやる」

おれの声、空走り、山から山へ届いていきます。

目の下から、かけのぼってくる黒い影、見えました。ポロシリの神、姿あらわしたのに違いありません。

「見ている、おれ、腹切ってやる」と、もう一度叫び、おれ、這松ふみつけ、すわりました。

刃の先、腹に向け、おれ、黒い影、見すえ

ました。四つの足、岩、蹴り崩れ、怒りのように転がりおちていきます。怒り、赤ひらき、ポロシリ神、おれの目の前で立ちよりました。

高く上げた前足の爪、白く光り、爪つむ神の毛、黒く光ります。

小刀握ったおれの手、動きません。板に彫られた神の渦、もうおれのこと守らない。

おれ、アイヌでないのですか。

黒い足、おれの宿敵、ひっくりかえるお

れの目に、空、あふれます。渦巻く神の小刀、おれの手から飛び、おれ、何も持たない岩の

かけらです……